

第8回教育委員会臨時会議事要録

詳細—教育部庶務課 電話03-3981-1141

附属機関又は 会議体の名称	教育委員会臨時会
事務局（担当 課）	教育部庶務課
開催日時	平成27年7月19日 午前9時
開催場所	教育センター
出席者	委員 菅谷 眞（委員長）、嶋田 由美（委員長職務代理者）、千馬 英雄、渡邊 靖彦、三田 一則（教育長）
	その他 教育部長、庶務課長、学務課長、学校施設課長、指導課長、教育センター所 長、統括指導主事、指導主事
	事務局 庶務課庶務係長、庶務課庶務係主事、指導課庶務係長、指導課庶務係主事
公開の可否	公開 傍聴人14人
非公開・一部公 開の場合は、そ の理由	なし
会議次第	第37号議案 豊島区立学校教科用図書採択について（審議）
備考	会議開催時においては、他自治体等の採択に影響を及ぼすおそれがあるため 会社名を伏せて議論を行いました。本議事録においては実際の会社名に表記 を修正しています。

菅谷委員長)

それでは、第8回教育委員会臨時会を始めます。本日の署名は、嶋田委員と千馬委員にお願いいたします。事務局より傍聴者の皆様へ注意事項をお伝えください。

<庶務課長 注意事項説明>

(1) 第37号議案 豊島区立学校教科用図書採択について (審議)

菅谷委員長)

それでは、ただいまから中学校教材用教科書の審議を行います。
配付資料の確認を事務局にお願いいたします。

<庶務課長 資料説明>

菅谷委員長)

次に、教育部長より本日の審議予定について説明いただきます。

<教育部長 資料説明>

菅谷委員長)

それでは、教科書の審議の方法について事務局から説明をお願いいたします。

<指導課長 資料説明>

菅谷委員長)

では、今御説明いただきました教科書につきまして、20分の時間をとります。ごらん
いただいて、後ほど御意見、御質問等をお願いいたします。

<委員 選定図書閲覧>

菅谷委員長)

それでは、中学校英語についての御意見をお願いいたします。

三田教育長)

個別の議論に入る前に確認です。本区は小学校1年生から英語活動を行っております。
文科省の5・6年生から英語活動をやるようにという指示に対して、かなり継続的、系統的
に行った上で中学校に入るという形をとっていると思うのですが、現行の教科書も含め
て、英語教育について小学生の接続部分でどのような成果があり、また課題があるのか伺
いたいと思います。

2つ目です。国の学力調査では英語に重点をおいているにも関わらず、あまり良い結果
が表れていないように思います。本区では英語について中学校2年生からデータをとって
いるということですが、そのデータではどのような傾向や課題があるのか教えてください。

それから、3点目です。今年の7月に発行されたある新聞の中に、中学校1年生が小学
校の外国語活動でもっと学習したかったことは何かという問いがあり、それに対して英単
語や英語の文の読み書きをぜひやりたかったという回答が、83%から79%まで並んで
いました。実際に教えていないと思うのですが、そういうことが今後の接続でどう影響し
てくるのでしょうか。以上3点を教えていただきたいと思います。

指導課長)

まず、小中の連携の成果でございますが、本区は小学校1年生が8時間、2年生が12、3・4年生が年間20、5・6年生が35時間ということで、平成18年から継続して英語活動を行っております。

大きな成果としては、子どもたちにアンケート調査等をとっているのですが、外国の方に対して物おじせずに発信ができるというような声があがっております。あるいは教育長からの2つ目の質問にも重なってまいります、区独自の英語の学力調査を見ますと、全国の平均到達率よりも大幅に上回っているという状況がここ数年続いております。例えばこの指数でいいますと、読むこと、書くことでいえば全国を100とすると本区は105ぐらい、3年生でいっても、読むこと、書くことは全国を100とした場合に本区は110ぐらいの得点率、達成率を上げているということで、小学校からの英語活動の成果は中学校の教育においても非常に大きな成果が上がっていると思います。

また、接続の部分の成果でいえば、一つは音に対する慣れがあります。今回も全ての時間にALT、ネイティブスピーカーを配置していますので、ネイティブの音に1年生からずっとなれ親しんでいますし、それからそのような外国の方と物おじせずに接する機会が多いということが、中学校に入ってから的好成績につながっているかと思えます。

また、中学校の指導についても、中学校の入門期というと文字指導でAからZまで書く指導、座学に近い指導がこれまで行われてきたわけですが、本区の場合は小学校で英語に対する興味関心が高まっている中、コミュニケーションを重視した英語教育を中学校のうちからやるべきだということで、そういったことについての指導の改善が大いに図られています。その結果がこの学力テストの結果につながっていると思います。

最後の3点目につきまして、これまでは小学校の英語活動においては英語嫌いをつくらないことを目的に、文字指導あるいは文法指導をせずに、歌やゲームを中心に体験活動を行ってきたわけですが、子どもたちの発達段階を見ますと、5・6年生ぐらいに知的にいろいろと発達してくるようで、そのような中でもっと文法的なことを教わってみたい、文字を習ってみたい、それを成果として発信したい、外国の方とコミュニケーションをしたいというような、要求や願望が非常に強くなってくるのかなと思います。

今後の指導としては、当然教え込み、塾通いにつながらないように十二分な配慮をする必要があると思いますが、今後さらに小学校の英語活動を拡充されていく方向が示されていますので、そういった視点での指導、改善、工夫を進めていかなければならないと考えております。

菅谷委員長)

ほかに、どうでしょうか。

今、小学校でも英語を取り入れ始めていますから、その成果をはっきりとさせて中学校につなげていかなければならないと思います。そうでないと、小学校での英語活動が意味をなしません。ただ、小学校で十分英語になじめなかった生徒が中学に入ったときに、そ

れをどう救っていくのか、そのスタートの部分はどう指導していくのかに関しては気になる場所です、教えていただきたいと思ひます。

指導課長)

先生御指摘のとおりでござひまして、中学校の教員の中には小学校の英語活動になかなかなじめなくて英語に対してある意味抵抗感を持って、中学校に進んでくる子がいるのではないかということをご心配している先生もおります。

学習活動の内容を見ると、知識の量については中学校へ入ってくる段階では皆さん同じゼロからというようなことで進めておりますので、そういった面では差が出ないように十二分に配慮しています。

また、英語嫌いというような知識の量というより資質という部分での差については、個別丁寧に別途指導をして、ストレスを和らげるような形で入門期の工夫をしている場所です。

千馬委員)

教科書を見させていただく中で、5点ほど各教科書に共通した特色があると思ひました。

一つ目ですが、小中の接続に関しましてかなり力を入れているように感じます。教科書会社によってページ数、内容等で温度差はありますが、今の課題を踏まえながら導入をしっかりとやろうという思いが伝わってきます。本区でも小学校ではもう英語活動になれ親しんでいるように思ひますので、それを踏まえてさらなる興味関心を高める上で、これは大事にしていくべき観点かと思ひます。

2点目です。どの社においても、職場体験等日常生活とのかかわりを英語でどう発信するかに触れています。東京オリンピック等、かなり日常生活に密着した発信をしているので、このあたりも小学校のつながりからすると大事な視点ではないかなと思ひました。

3点目に、日本の文化を英語でどうアピールしていくのかに関しても、各社努力していると感じます。

それから、会話力あるいは発信力というのはかなりのレベルでこれから期待されていくと思ひますが、同時にそれをある程度文字表現していくこともまた今後求められてくると思うので、その辺り各社どのように記載されてあるのか、注目したいと思ひます。

最後に、辞書の活用も非常に大事なもので、指導していく上でぜひ教科書と共に辞書の活用を充実していただけたらありがたいと思ひます。

これらを踏まえて、豊島区の英語教育において各学校では書く力についてどの辺を大事にされているのか、教えていただけますでしょうか。

指導課長)

学力調査の結果を見ますと、書くことについて2年生は全国平均を100とすると105ポイント、3年生は112ポイントという成果が出ておりますので、大変習熟がなされているのかなと思ひます。

特に平成20年以前の学習指導要領では、目標が話すこと、聞くことなどの実践的コミ

コミュニケーション能力ということで音声言語にかなり偏っていたのですが、どうも現場で教えていると書くことと連携していかないと頭の中に残らない、あるいは文法指導も系統立てて、必要なときは日本語で文法の規則を教えるということをやらないと頭の中に残らないという結果が出ておりましたので、今回の学習指導要領では4技能を統合的に学習するような形になっております。最後のまとめですが、これからインターネットの時代でもありますので、書くことも、話すこと、聞くことと同等に重視をして指導していかなければならないということで、各学校、指導を今徹底している状況でございます。

嶋田委員)

私は、言語の教育という観点から全体を見させていただきました。言語をどう教えるかということは、自分の考えをどう伝えるか、自分と他者をどうつなげるかということだと思うので、そのような観点から見させていただいたところです。

どの社もよく構成されていると思ったのですが、中でも例えば学校図書は最初に英語だけではなく世界のいろいろな言葉の挨拶というところから入っているのが、大変おもしろいと感じました。学校図書の場合は他社と比べて、英語圏だけではなく、英語を使ういろいろな国や地域の人たちとコミュニケーションをとれるようにするという発想だと思うのですが、イラストにいろいろな地域、国の人たちが使われていたり、中心人物もインド出身の子どもであったり、あるいは日本人とインド出身の子どもであったりして、そのようにいろいろな地域とつながっていけるという発想がおもしろいと思いました。

それから、もう一つ、言葉というのはどうおもしろいのかという観点を英語だけに限らずぜひ教えていただきたいと思うのですが、光村図書では一つの英単語がどう組み合わせることができるかというあたりを分析的に例示していて、その点、子どもたちが言葉ってこうつくられているのか、では何か違う言葉に発展できるかなと思えるような、学習が発展できるような仕掛けができていたと思います。

とはいえ、英語は、得意教科とする生徒と苦手意識を持つ生徒とで分かれる教科かもしれないので、どのようにしてイラストや写真を使って中に入り込めるかという観点からも選ばせていただきました。

ただ、学校図書はすごくおもしろいと思ったのですが、ほかの各社が例えばチャプターやユニット、プログラムという形で単元構成しているのに対して、学校図書だけ飛び抜けて大枠でくくっています。その中でいろいろな段階で教えるという形になっているのですが、そのことが先生方にとって教えやすいのか教えにくいのか、あるいは生徒にとって、一つの単元が終わって次に行けるという喜びを持って、期待感を持って学習に臨めるのか、臨むときにそれがどうなのかという点若干気になったところです。もしその点でなにか御意見があればお聞かせいただけますでしょうか。

指導課長)

各社それぞれ構成を工夫していますし、どの教科書も非常によくできていますので、十分授業で対応はできます。

ただ、これまではどちらかというと指導計画をつくる時に、何月はレッスン幾つをやるかというような、教科書をどう教えていくかという視点が強かったのですが、これからは教科書で教える、つまり習った英語で何ができるようになるのかということを中心に指導計画をつくっていくようになります。そういった意味で、各社で出ているプロジェクトというようなものを、一つの大きな到達目標として子どもたちに意識をさせることができれば、より一層英語学習の意味を自覚した上で意欲的に学習ができるのではないかなと思います。

渡邊委員)

質問です。各社ともにCDが当然ついていると思うのですが、1年生、2年生、3年生全部についていると考えていいのでしょうか。

指導課長)

子どもたちが個人の判断で買うものですが、各出版社ともに教科書に準拠した教材は用意しております。

渡邊委員)

中学生になって英語は期待を持って学ぶ学科であると同時に、一度入門のところですれてしまうと取り返しがつかない大変重たい学科でもあります。生徒の状況を見てみると、まず聞くという機会が今の世代には非常に少ないと感じます。例えば外国映画を昔は絶対的に字幕で見えていましたが、今は日本語吹きかえ版がありますので、そもそも耳に英語が聞こえてこないような環境になっています。小学校でネイティブの先生から発音を習いますが、それにしても例えばイギリス人もいればアメリカ人もいるということになると、そもそも発音自体に誤差があり、それが非常に子どもたちの障害になりやすいと思います。その点を踏まえて各社の教科書を発音というところから見させていただいたのですが、きちんと発音記号に応じた口の開き方等が記載されている教科書もあれば、ただ単に発音記号だけというところもあるので、学校でどのぐらい発音に対して時間を割くことができるのか教えていただきたいです。

結局発音ができなければ聞くということも難しいと思います。発音があつて初めて英語が自分たちのコミュニケーション手段として使えるようになっていくのであり、文法等はそこから先にくっついていくものではないのでしょうか。

1年生のこの6年生からのつながりを見ていると、まずは物を英語で言えようという会社と、会話をしていましようという会社と各社それぞれです。いずれにしても、中学生だと高校入試のときにもヒアリングがついて回りますので、発音と聞くということを大事にしていく必要はあるかと思います。アメリカ人やイギリス人は当然赤ん坊のときから英語になれ親しんでいるため耳がなれているわけですが、日本人はそうではないので、聞くということは一番大事な部分だと考えます。そういう発音や聞くということに関して、検討部会で何か意見が出ていたら教えていただきたいです。

指導課長)

まず、発音の指導ですが、音読の指導がすごく大事です。英文を読めなければ、単語は覚えられません。英語が得意な子は必ず音読ができますし、音読が苦手だけど英語ができるという子はいません。だから音読をまずできるようにするというのが一つのゴールです。

それから、指導に関していえば、各学校指導用の教材を準備してまして、今、本区はICTが非常に充実をしておりますので、電子黒板、ICレコーダー、あるいは従来のCDプレーヤーを使ってネイティブの発音と、先生本人の発音と両面から指導しています。ネイティブだけだと、子どもにとってそれが本当に一つの目標になるかどうかはあやしいところです。日本人である教員の生の発音が一つの到達目標になるということもありますので、テープにだけ頼るのではなく両方併用していくという形で、各校指導をしております。聞くことの指導を重視して、リスニングも必ず1時間に1回は入れるというような、教科書自体そのようなつくりになっておりますので、その辺り指導は今充実をさせているところです。

三田教育長)

私も全部見させていただいた印象として、会話重視でオリンピック・パラリンピックを意識して演出している部分と、キャリア教育という自分の生き方、職業観を取り上げている部分が各社見られ、今後の英語教育に期待を持てる内容が盛り込まれていていいなと思いました。あわせて日本の伝統文化あるいは自分というものをしっかり語れるものが教材として配置されていることも非常にいいなと思いました。各社の違いがどこに出ているのかと考えましたところ、意外と構成上の工夫というところで見られました。例えば教科書のサイズを見ても、ワイドなサイズであったりB4のサイズであったり、それぞれです。サイズに関係なく内容がどう構成されているのかという点でいうと、付録が多いか少ないかの違いがありました。別冊の付録については、硬軟両様あるかと思います。なくしてしまう可能性がある一方、別冊になっていると両方二元的に学習ができるので、うまく使うとすごく有効的です。その辺りをどう考えるのかということが問題かと思います。

それと接続に関しまして、本区の子どもたちの到達状況を踏まえると、一年生の接続部分においてあまりに丁寧で簡単過ぎる導入では、子どもたちにとって逆につまらないのではないかと感じます。ある程度本区が積み上げてきた成果が、円滑に接続されるような教科書がいいかなという視点で見させていただきました。

また非常にいいなと思ったのは、学校図書の接続部分でして、小学校で行ってきた外国語活動を上手に反映しているなと思いました。1年生から3年生まで一貫して話せる英語を掲げているという点、話せるということが今までずっと課題で、何年やっても話せないという生徒もいたので、とても良いと思います。例えば、修学旅行や自分のまちの観光パンフレットをつくるといったことは、自分のまちの誇りを語ることにもつながりますし、オリンピック・パラリンピックの際に伝えることもできるので、この題材の取り上げ方は非常におもしろいと感じました。それから、3年生では浴衣やいろいろな日本の行事

について扱っていますが、これはこれまでやってきた例えばイングリッシュキャンプの大学等と連携しての成果や、R&Cフェスタ、また本区で行われてきた小・中学生が一緒になって読み聞かせで表現するというような活動等に接続しやすいかと思います。また受験にきちんと対応できるように、別冊ではなく一体化した資料の構成になっていて、語彙を重視しているということも考えられます。

あと注目している東京書籍ですが、同じようにオリンピック・パラリンピックや職場体験、また東日本大震災を反映させており、環境保全というところでは教材に国際的なセンスが反映されていて、共感を持てる内容の選択ができていたと思います。

それから、他社ではあまり見られないのですが、使用上の便宜で名作を掲載しています。長文で読むということも、中学生の時代にぜひやっていく必要があることだと思いますので、長文読解を苦手としないように、読む、書く、聞く、話すという4技能がバランスよく配置されているという点で東京書籍の編集の仕方も非常におもしろいなと思いました。

あと日常生活を取り上げて電話や買い物、キャリア教育やセルフスタディということまで辞書の引き方や活用の仕方まで取り上げており、子どもたちに原点に戻って語学を習得させる工夫がいろいろなされていると思いました。

それから、キャンドゥーリストについてです。細か過ぎても、粗過ぎても子どもがチェックできるのかという点で疑問を持っていましたが、とてもいい編集がされているかなと

光村図書も特にその他の使用上の便宜のところで、他教科の内容を英語で学ぶという、おもしろいとりあげ方をしています。子どもが一旦体験したことを英語に置きかえてしゃべるとするのはこれからぜひ必要な活動だと思いますので、これはおもしろいアクションプログラムだと思います。

それから、非常にいいなと思ったのは巻末の構成です。非常に丁寧にジャンル別に整理されており、こういう整理のされ方をすると子どもが自学自習をしていくときに基礎基本をきっちり踏まえてやれるという点で、非常にいいなと思いました。

それぞれすぐれた特質を持っているかと思うのですが、最終的には本区の子どもたちの実態を踏まえて判断していきたいと思います。

菅谷委員長)

最後に少し伺いたいのですが、今の英語教育におきまして、コミュニケーションの能力が弱いという点が一番大きな反省となっています。ですから教科書を見るとほとんどは会話のことが中心となっており、一方書くということがあまり重視されていないように感じます。たとえば筆記体は全然教科書に出ていませんが、これについて今の実態はどうなっているのでしょうか。

それから、小中ではカンバセーションを中心とした教育になっていると思うのですが、高校でもコミュニケーションを主体とした教育になっているのでしょうか。それとも長文読解のような、文章理解の力の向上を目指しているのでしょうか。以上2点、お教え願います。

指導課長)

1点目の筆記体につきましては、学習指導要領の中で学習者の負担にならない程度に配慮し指導することもできるとしておまして、毎時間黒板の板書を筆記体でしているという学校はありません。ですので、英語が好きで筆記体をやってみたいというような子が自主的に書くということはありますが、各学校の子どもたちはほとんどがブロック体で書いています。

それから、高校の英語に関してです。高校によっても様々ですが、大学入試の問題はやはり避けては通れません。コミュニケーション重視で話すこと、聞くことを中心にやっていたとしても、センター試験や各学校の大学入試を見たときに、それだけで対応できるかといえば難しいところです。ただ、方向性に関しまして、今、都立の国際高校では国際バカロレアコースを設けたりしていますし、コミュニケーションに使える英語を習得させていこうという方向をとっていることは間違いありません。入試制度も今変えていく方向で国のほうで鋭意検討が進められているので、全体としては東京オリンピックを視野に入れてコミュニケーションができる英語を国全体で身に付けていこうという方向性をとっています。

しかし、現実として高校へ行ったときに本当にオールイングリッシュの授業をしているのか、会話、コミュニケーションが中心かどうかといえば、旧態依然としていわゆる文法、訳読的な授業があることも事実です。それはやはりいろいろな事情で、子どもたちの出口の問題でそういったニーズに応じての教育が行われているのではないかと考えております。菅谷委員長)

結局コミュニケーションの問題でいうと、話せるということも大事ですが、そもそも聞き取れないと話せないわけです。つまり話す中身は聞くのが全体主になってくるので、リスニングの副読本と副教材も含めて選ばないといけないのかなと思います。ただ、どの教科書もカンバセーションを主体とした内容については、非常にわかりやすいと思います。

副教材については、どの社も大体同じようなものなのではないでしょうか。

指導課長)

大体同じような内容かと存じます。

それから、聞くことについてはまさに先生おっしゃったとおりで、ネイティブの発音の中には学校英語で習わないようなスラング、俗語もいっぱい出てきますし、外国の小学生の英語というのはなかなか聞きづらい部分がありますから、ネイティブと実際に会話をする機会を増やしていかないと、コミュニケーションをとれるようにはなかなかならないという実態はあるかと思えます。

ただ、各学校では、今、英語の歌を毎時間必ず聞かせるような指導をしています。英語のリズムに慣れさせる、あるいは英語のスピードに慣れさせるというようなことで、教科書だけにとどまらず様々な教材工夫をしながら今指導を進めているという実態でございます。

菅谷委員長)

大体皆さんの御意見伺いましたので、ここで中学校の英語の教科書について御審議の結果の投票をお願いいたしたいと思います。

<委員投票、確認>

菅谷委員長)

今、皆様に御確認いただきましたとおり過半数を超えるものがありましたので、英語についての審議を終了いたします。

菅谷委員長)

続きまして中学校保健体育について御説明をお願いいたします。

<統括主事 資料説明>

菅谷委員長)

皆様資料をごらんになっていただき、その後御意見、御質問を伺います。

<委員 選定図書閲覧>

菅谷委員長)

それでは、保健体育についての御意見、御質問をお願いいたします。

三田教育長)

私どもも生活習慣の中で発生するがんのメカニズムについて、基礎的な学習をしようと区独自にやってきたわけですが、学習指導要領の段階ではまだ現行のものは、がんの教育をしっかりしなさいという話にはなっていないということでもよろしいですか。本区では、生活習慣病の中にがんを位置づけたときに、日本人の2人に1人はがんにかかっており、そのうちの3人に1人ががんで命を落とすというようなことに統計上になっているにもかかわらず、がんについては警告以上の指導はなかったかと思います。学習指導要領の位置づけについて、確認のためお伺いしておきます。

統括指導主事)

おっしゃるとおり、本区のがんに関する教育における位置づけは、学習指導要領の内容を超えるものではございません。教材を開発する部会で話が一番進んだところは、どの部分で学習をするのかというところで、保健の学習指導要領によりますと、健康な生活と疾病の予防というところがまず重要だという話になりました。その中でも、この分野につきましては健康の成り立ちと疾病の発生の要因、それから生活行動、生活習慣と健康、喫煙、飲酒、薬物乱用と健康、感染症の予防、保険医療機関や医薬品の有効利用、個人の健康を守る社会の取り組み、今申し上げました中のどの部分に位置づけるのがふさわしいかというところで、特に生活行動、生活習慣と健康という部分に本区が行おうとするがんに関する教育を、がんという病気の切り口でクローズアップして学習をしていこうという方向に話が進んでいます。

ただ、がんに関する教育というのは、生活習慣だけでなく、喫煙や飲酒、薬物にも関連

してくるので、本区では全体の健康な生活と疾病の予防というものを網羅できる教材をつくって進めており、まさに学習資料に位置づけた形で進めているというところを、御確認として申し上げたいと思います。

菅谷委員長)

渡邊委員、どうですか。

渡邊委員)

まず東京書籍だけ各学年ごとで区別がされているのですが、がんや薬物乱用に関しては学年で区別しなくてもいいかと思いますので、果たして使い勝手はどうかと感じました。

内容的には、各社それほど変わらないかと思うのですが、例えば運動をすることについてどう学ぶかという点では、ページ数がかなり割かれている会社と、そうではない社と様々でした。生徒が教科書として使うということを考えると、運動のルールではなくなぜ体育が大事なのかを教えられるような教材が良いかと思いますので、体操やスポーツの重要性に関して、ある程度ページが割かれて説明されているほうがわかりやすいのかなと感じます。

それから、最近気になっていたのが薬物乱用についてです。各学校、土曜公開授業等で警察や保健所の方と連携して講習を実施していると思いますが、その辺が教科書でどう描かれているのかという点を中心に、比較させていただきました。学研に関しては、合法ドラッグと書いてあってもいいのかという投げかけがされています。麻薬はいけないものだというのを教えようとしても、たばこのように自動販売機で売っているようなものではないので、幾ら写真で見せても、子どもたちにはびんとこないというのが彼らの本音だと思います。だからそれをどうやってわからせるのかということになると、学研のように合法ですよと書かれていても危ない、自分たちで考えなければいけないという注意喚起をきちんとすることが大事だと思います。あとは自分だけでなく社会に対しても影響が出るということに関して、細かく書いてあるほうが良いかなと思いました。そういった観点から見させていただきました。

三田教育長)

一点確認させてください。

たしか昨年の5月に本区で事件がありまして、脱法ドラッグという名前から危険ドラッグという呼び方に変ったかと思います。脱法とは法律から外れているということですが、紛らわしいということで最終的に国の厚労省の判断で危険ドラッグという呼び方になりました。そしてこの教科書をつくる過程の中では、当然そういう情報を受けて書いていると思うので、危険ドラッグという呼び方を使っていい段階だったのではないかと思うのですが、それはどうなのでしょう。編集をして最終的に文科省の検定を受けるまでの間に、危険ドラッグか脱法ドラッグかはっきりしていなかったのか、その時期の問題について教えていただけますか。

統括指導主事)

時期的には間に合ったのではないかと考えます。今回まだ脱法ドラッグという表記がされている社もありますが、これについては、今後危険ドラッグというように訂正が入るということもあるのではないかと捉えております。どの時期までにそこが間に合ったのかどうかというところまでは申しわけございません、確認ができておりません。

三田教育長)

すごく大事な問題だと思います。言葉の統一や考え方の一致した国民的なコンセンサスをとっていくという点では、教科書に敏感に反映させていく必要があるのでは、それに関しては、採択日までに明確に調べておいていただけないでしょうか。文科省はどういう指示をしたのか、あるいは教科書検定の段階でそういうことが議論されていたのか、その点が気になります。本区にとっては脱法ドラッグを危険ドラッグに改めるという確認を全体でしながら行政行為を進めてきましたし、学校に対しても徹底してきたので、これに関してはしっかり確認をお願いいたします

菅谷委員長)

嶋田委員、どうですか。

嶋田委員)

今、教育長がおっしゃったことに関して、例えば大修館書店の場合、137ページに法律の問題との時間差のところでドラッグ、違法ハーブなどという言葉を出して、違法とされる前と後とは実際に害は異なるのかというようにいろいろなことを考えさせるコラムも出ています。

私は心の問題のところを中心に見させていただきました。自分自身の関心として子どもたちがストレスに向かい合ったときにどう対処させようとしているのか、どういう道を開かせようとしているのかという観点から見させていただいたのですが、例えば大修館書店は、心も風邪を引くというコラムを設けており、なにか悩んだときにすぐ相談できる場所と示しているところが、子どもたちがページを開いたときに聞いてみたいと思えるような仕組みになっていて、今の子どもたちを取り巻く環境の中ですごく配慮された作りになっているのではないかなと思いました。

一方で、薬物については、すごく細かく分類をされている社と大ざっぱに3種類ぐらいに分類されているところがあったかと思えます。特に細かく分類されているところは俗称として世の中で言われているようなマリファナやシャブといったいろいろな名前が載っていて、かえって検索をかけたりして興味関心を引きそうな気もしないでもないなと感じました。

三田教育長)

すみません、改めて全部見たのですが、どこの社も危険ドラッグという用語が使われていないので、恐らく編集の時点ではそこまで至る経過がとれなかったのではないかと判断

させていただきます。

菅谷委員長)

千馬委員、いかがですか。

千馬委員)

4社、どの社も健康、安全をキーワードにして非常に真摯な自己管理、他社とのかかわりや情報の適切な入手を進めた具体的な事例、内容があると感じました。

一つ質問というか、本区の自己の健康、安全に関する関心度に関しまして、私は高いように思っているのですが、具体的に何かそれに関して頑張っているような印象に残ることがあれば教えていただきたいと思います。

統括指導主事)

まず、保健の授業において一番私が見る機会が多かったのは、どうしてもがんに関する教育なのですが、これまでの経過を見ていますと自分の健康は自分で守るという意識が非常に高まっているのではないかと感じます。

例えばですが、たばこは将来大人になっても吸わないですとか、お酒についても飲み過ぎないようにしていきたいですとか、中学生は中学生なりに自分の将来を見て、こうしていこうという前向きな姿勢を持っているように思います。これはがんに関する教育の分野だけではなく、どの保健の分野においても、学んだことを自分の生活に生かしていこうという姿勢は見られると考えております。

統括指導主事)

7月11日の土曜日に、駒込中学校で3年生の女子生徒を対象に健康をテーマに女性の美という内容の授業が行われました。これは中学、高校時代に過度なダイエットをしたことのある女性が子どもを産む際に、子どもが未熟児で生まれる割合が非常に高いというデータを基にして、無理な減量等はよくないということを伝えるために総務省と企業が連携して実施した授業です。生徒たちは非常に熱心に話を聞いており、その内容を受けて、夏休みに基礎体温を1カ月はかることで自分の体調管理をします。日ごろの生活を意識して送ることで生涯にわたり健康で、元気な赤ちゃんが産めるようにという内容の授業でした。

本区は8校全校で中学生の骨密度を測定しておりまして、運動することが自分の健康にとって大変重要だという認識はもともと持っています。その延長線上に今回の授業も位置づいておりまして、自分自身の健康やふだんの生活の見直しをするいいきっかけになったと思います。現在中学校2校で実施をしていますが、今後さらに広げていきたいという思いでおります。

菅谷委員長)

保健と体育ということですので、どうしても内容からすると保健のほうの分量が増えてしまうと思います。しかし、スポーツ、運動がどういう位置づけなのかということ、運動するというものの一番基本的な部分を学校で教わるというのはいいことだと思います。

スポーツというのは、ほんの一部の人は勝てるわけですが、勝てない人の方が多いわけ

です。では勝てない人はなぜやっているのかといえば、楽しいからやるわけで、そういったところが実践的に教育されればいいなと思います。

あと保健のほうで、いろいろお話がありましたように、自分の健康は自分で守ることが一番基本的で大事なことではないかと思えます。健康というのは安全安心につながっているわけで、自分が安心をする、自分の安全を守ることの中の大きな対象に健康を維持するということが入っていますので、健康について予防できれば一番いいですね。ただ、実際にはそのとおりにいかないのが困っているわけですが、知識としてこういったいろいろなことが、教科書に記載されているのはとても良いことです。

また、今各国の制度では40歳から生活習慣病の検診が始まっているのですが、医学的に考えると30代からやったほうが本当はいいのではないかと思う程、早期に始めたほうがいいと思います。ある程度年になると生活習慣というのはなかなか変えられないものですが、若いときであれば、生活習慣をいろいろと自分でコントロールしていけると思えます。そういった意識をつくるのが中学校の教育です。小学校はなかなかわかりにくいと思うので、中学校あたりでそういう教育ができれば意識が続いていけるかと思えます。その意味で中学校は本当に大事な時期なので、それについてはどの教科書も内容的に触れていて、いいかなと思えました。ほかに御意見ございますでしょうか。

三田教育長)

全体として今の中学生は体育の面でも、体育理論というか体育技能を高める視点と健康を考えていくという視点の両面から、今日的な課題によく応えているなという印象を持ちましたし、全体を通しての保健体育の指導の向上につながるのではないかなと思います。

本区は、特に保健体育の部分で、安全安心とクロスしながらいろいろな取り組みをやってきましたが、がんに関する教育や、歯と口腔の衛生に関することについては、教科書に期待しても指導要領で書かれていないのでなかなか難しいなと感じました。

ちなみに、がんについてはどの教科書も触れているようですが、非常に部分的に感じました。がんのメカニズムや対処法、またメンタルの部分について触れているのは大修館書店や学研くらいで、あとはあまりかかれていないようです。それから、残念ながら歯と口腔の衛生について触れているところはほとんどないというというのが気になりました。それは小学生でやるべきという考え方なのか、中学校でも伸び盛りの子は大事だという話になるのかわかりませんが、本区では8020という取り組みを行っていることも考えると、少し寂しい気がしました。

次回の学習指導要領改訂では、そうした問題を子どもたちの健康上取り上げてもらえたらありがたいという期待と希望を持ちました。本区の課題としている体力向上については、大修館書店は体力向上の計画づくり、体力テストをどのようにやったらいいかということに関して、4ページにわたって触れており、これは使えるなという印象を持ちました。

それから、熱中症について、体育でどのように指導されているのか気になりまして、見させていただいたのですが、大修館書店、学研は、きちんと対応の手続について考えさせ

ながら対応するという工夫がされているところがいいかなと思います。

あとがんに関する教育について、大修館書店では系統化して生活習慣のあり方について3カ所にわたって書かれているので、これは本区でがんに関する事業に取り組んでいるということを考えますと、非常にフォローしやすい教科書として活用できると思いました。

保健体育の授業は非常に授業時数が少ないと思うのですが、実技にとられてすぎているのではないのでしょうか。本区は体力が低くて課題であると言われていまして、授業をどうやってコンパクトにしていくかということが大事だと思います。そういう意味では調べときなさい、見ときなさいというような結果として目に触れないであろう使い方ではなく、基礎基本になるところはしっかりと授業の中で学習を通して認識していく、あるいはできるようにするための工夫を考えていくべきだと思います。その点大修館書店は、カラーコーンを描いてコラムと用語解説、脚注と本文とを仕分けしており、メインになる教材、大事な教材をこだわっている、明確になっているように感じます。全体として授業で使いやすい構成がされているという点ですぐれていると思いました。

いずれにしても、非常に水準が高い教科書4種類を拝見させていただきました。

菅谷委員長)

それでは、大体議論も出尽くしたと思いますので、中学校保健体育について投票をお願いいたします。

<委員投票、確認>

菅谷委員長)

ただいま皆様御確認いただきましたとおり過半数を超えるものがありましたので、保健体育についての審議を終了します。

以上で午前中の審議を終わります。

審議結果の確認は、先ほど申しましたとおり8月26日定例会において行いたいと存じます。

なお、本日午後1時より中学校数学、技術家庭の審議を行います。

菅谷委員長)

それでは、中学校数学について御説明ください。

<統括指導主事 資料説明>

菅谷委員長)

今御説明いただきました教科書につきまして、20分の時間をとりますので、ごらんいただき、後ほど御意見、御質問をお願いいたします。

<委員 選定図書閲覧>

菅谷委員長)

御質問ありますか。

三田教育長)

本区が教科書をどのように使っているのか、小学校では、比較的問題解決的な学習を徹底して定着させていると思いますが、中学校はどうか、それから本区では個別に、個人の学習履歴をしっかりと把握しながら学力調査をやっていますが、その成果はどのようにあらわれているのか、またどの単元に課題があるのか、教えてください。

統括指導主事)

毎年4月に区独自の学力調査を実施しております、経年で変化をずっと見てきているのですが、ここ何年かで数学の力は着実に伸びております。今年度4月に実施をしました学力調査でも、3年生は数と式の内容は全国の数値と比べて106%、図形の内容は104%、関数の内容についても104%、資料の活用の内容は105%となっており、全ての項目で全国の数値を上回っております。また、観点別で見ますと、数学的な見方や考え方では全国と比較して108%、それから数学的な技能ということで計算等ですがこれが104%、知識理解も104%となっています。ただ数学への関心・意欲・態度という観点で3年生で92%となっており、全国を下回っております。

教科書をふだんの授業でどのように活用しているかという御質問ですが、全校習熟度別に少人数授業を行っておりますので、教科書をメインの教材として使い、授業を進めております。小学校での問題解決学習はかなり進んでいるというお話でございましたが、中学校でもかなり問題解決的な内容を取り入れた授業を行っております。一人一人の生徒が自分の考えを持って、お互いに友達と意見交換をする中で、さらに自分の考えを深めたり、自分とは違う考え方に触れてさらに考えを広げたりというような活動を行っておりますが、全ての内容を日ごろの授業の中で取り扱うというのは難しいであろうと思います。そのあたり教員が子どもたちの実態に応じて題材を選定し、授業の中で活用しております。

統括指導主事)

補足を致します。関心・意欲・態度という部分で、先日たまたま指導課訪問に伺った中学校では、一番好きな教科が数学だという中学校もありました。その中学校の各学年の数学の授業を見たのですが、やはりノート指導がしっかりと行われておりました。それはとりたてて今始まったことではなく、過去ずっと訪問させていただいていた中で、かなりノート指導をしっかりとされていたなと感じる中学校です。ですので、大体体育や芸術、芸能の教科を好きな教科として上げる中学校が多い中、そういった中学校も登場してきているということを御報告させていただきます。

三田教育長)

学力テストを分析するときここ数年間、平均点ではなく伸び幅の大きい学校あるいは個人という言い方をしていると思いますが、今のご報告は、ノート指導が徹底されていることで子どもたちの伸び幅が大きく伸びてきたという理解でよろしいですか。

統括指導主事)

好きな教科とノートの指導の徹底、そして成績が伸びしろに関する因果関係というところ

ろまではまだ現在、はっきりとはしていないのですが、いずれにしても関心・意欲・態度が非常に高まっているということは間違いないかなと思っております。

菅谷委員長)

先ほど説明では、習熟度による授業があるということでしたが、その習熟度の授業というのは、教科書、ノートに関してどのような違いがあるのですか。

統括指導主事)

基本的な教材は同じですが、扱い方に多少軽重をつけております。例題を一つ一つ丁寧にスモールステップで解説を加えながら練習問題に取り組んでいたり、習熟が進んでいるクラスにつきましてはさらにそこから発展をさせ、難しい問題にチャレンジしたり、または同じ問題につきましても様々な解き方で、3パターン、4パターンで解いてみたりといったような形で、それぞれのクラスで子どもたちの実態に応じて先生方が工夫をして進めているという状況でございます。

菅谷委員長)

それから、数学は皆さん結構つまづく科目かと思うのですが、例えばどういうところでつまづくのでしょうか。それによって、対策、あるいは教科書内容等が変わってくると思うのですが、どうでしょう。

統括指導主事)

小学校と比較すると、1年生の段階で、小学校と比較すると抽象的な概念が入ってきますので、半具体物等を用いながら細かく説明をする形で授業を行っているのですが、子どもたちからすると難しいようです。その点がつまづくポイントとして一つ上げられます。

それから、進むスピードが小学校と比べて速いと感じる生徒がいると思います。教科書会社によっては、例えば大日本図書だと見開きで1時間の内容を設定されています。ただこれを1時間でやるといったときに内容にもよりますが、負担になる子もいるであろうと思います。ですから1時間に学習する内容は小学校と比べるとやや多いということから、なかなか理解をして次の授業に臨めない、または1日お休みしてしまったために少し内容が抜けてしまって、その復習等が追いつかないといったようなことからつまづいてしまうという例もあると思います。

今回1年生の教科書を中心に御説明をさせていただきましたが、小学校から中学校に入学して中1の段階で算数から数学と名前が変わったときに、数学に対しての苦手意識を持たせないような、または数学がいかにふだんの生活とつながりがあるのか、自分の身の回りのことに役立つかということを教員自身も十分に理解し、これらの教科書を活用してもらおうと、より子どもたちが中学校の数学にスムーズに対応していけるかと思っております。

菅谷委員長)

確かに文字が入ってくると抽象的、蓋然的になるので、そこでわからなくなってしまう、そのままずるずる行ってしまうというような傾向があるのではないかと思います。その辺、説明が随分書いてあると思いますが、説明の文字だけでもわかりにくくなってしま

う場合もあるので、もう少しシンプルにいけるといいのかなと思います。量的に多過ぎるということはないですか。

統括指導主事)

全ての内容に取り組むとなると非常に多いと思います。ページ数も4年前に比べてかなり増えています。単純に問題だけが aumentando というのではなく、ノート の書き方等かなり丁寧に各社取り扱っていますので、そういうところのページが増えたということもありますが、内容的にももちろん増えておりました、これを全て授業の中でやるというのはかなり厳しいと思いますので、軽重をつけながら取り扱うといった形になると思います。

三田教育長)

学校の中でできるボリューム、子どもが自主的に取り組む対象になるボリュームの配慮に関しては気になることです。

それから学習をサポートしていくための丁寧な説明やワンポイントを考える視点を与えるということも大事だと思います。今回、総ページ数も調査資料に入れていただいているのですが、一番少ないところで802ページ、多いところで940ページと138ページも差があります。この差は別冊が入っているということ、つまり別冊もこの総数の中に入っているという理解でよろしいですね。

渡邊委員)

習熟度別ということですが、実際に学校現場で数学の時間を見学させていただくと確かに分かれていて、理解度の低い生徒の教室を見ていると、ほとんど先生が誰かに取っかかりきりというケースが多い。教科書の中でも非常に間違えやすい場所が提示されている教科書と、計算の仕方が非常に丁寧に細かく書いてある教科書とあって、ある程度数学的な理解が高まっている子どもたちには十分理解できると思うのですが、数学が得意ではない子どもたちだと、1つ丁寧に1行入っているだけでも随分理解度が変わってくると思うので、その辺に各社いろいろ違いがあると思いました。

現実に教室で教科書を使って教えるということ考えた場合に、そこまで細かく書いてある教科書のほうが先生方は使いやすいのか、それともそこは教科書を見てもらえば十分わかるし、説明してわからなかったら教科書を見るようにという指導をするのか、また先生が丁寧に説明したものは全部黒板に書き写してノートにとらせるという指導になるのか、それによっても、教科書の中身の軽重はかなり変わってくると思うので、その点、どちらが行われているのか、または、どちらが望ましいのかというところがあれば教えてくださいませんか。

統括指導主事)

より丁寧に書いてあるほうが子どもにとってはわかりやすいと思います。導入の場面や非常に間違えやすい問題については先生方も一つ一つ細かく丁寧にやっているとありますが、いつまでにどこまで指導しなければならないということが決まっているので、おおむねクラスの中の子どもの実態に沿って、ほぼ全員が理解できるようなレベルに合わせ

て授業を進めています。

今、渡邊委員がおっしゃったように、個別の指導が必要なお子さんについては全体で問題を解いているときに声かけをしたり、長期休業中に個別に呼ぶなど対応して下さっている学校もございます。ふだんの授業の中ではこれだけの分量なので丁寧に扱いきれないといったことを考えますと、家庭で自学自習をする際に数学が苦手だと思っているお子さんたちにとっては、この教科書が勉強する際に一番の参考書となりますし、これを開くことで日ごろの授業を思い出して復習をするといったことに使えますので、そのあたりの視点でごらんいただくことが良いと思います。

菅谷委員長)

嶋田委員、何かございますか。

嶋田委員)

私は算数から数学に移行するときの子どもたちの心理的なギャップという点から、見せていただきました。1年の最初の単元の正と負のトピックに関して、イラストや絵、写真が多ければいいというものではないかもしれませんが、具体的に身近なもので始めてそういう問題を考えられるようにステップが踏まれている社が幾つかあって、いいなと思いました。

それから、生活の中で数学的な考え方がいろいろなところで応用されているということ、写真や読み物で明記している社もあり、数学とは単に計算だけの問題ではなく、自分たちの生活の中にとっても身近なものであるということ、少し認識して興味付けられるような部分があるなと思いました。

社によっては、例えば学校図書みたいにすごく細かくインデックスをつけることによって、今どういうところに自分がいて、この例題を解くと次にどういうところにいくのかという道筋がわかるような教科書づくりをしており、そこに意味があると思いました。

菅谷委員長)

千馬委員は何かございますか。

千馬委員)

私は関心・意欲を高めるという視点で、各教科書を見させていただきました。

4点ほど特徴があると感じました。1つがノート工夫、活用で、結構力を入れて各社大事にされているということが伺えました。

それから、パソコンの活用を図るという点、これは教育効果を高める一つ的手段として重視されております。

3点目が、学び合いということ、つまり順序だてて押さえて伝えていく、数学的に情報提供していく、そういうことを現在は重視されているのだと思います。

最後に、導入を工夫するという点で、各社力を入れておられると感じました。表現の仕方はそれぞれ違いますが、教育効果を狙ってつくられている点では共通しているかと思えます。そういうことを教師がいかにか指導上生かしていけるのか、その結果として関心・

意欲が、本区の場合どのぐらい高まったのかという点が非常に大事だと思います。

学力は向上されているということでしたので、その効果は一つ出ているのかなと感じますが、それを踏まえて、習熟度指導のときの学び合いに関して、中学の場合、物理的に量も多いですし、かつそういうことを保証して教科書会社が力を入れているとすると、現在そのあたりについて伝え合う授業の大事さというのを豊島区ではどのように受けとめながら実践されているのか、参考までに聞かせていただけたらありがたいなと思います。

統括指導主事)

今、千馬委員おっしゃったように、算数から数学に変わることさらに意欲が低下していく子どもたちがいるのと思っております。私も各学校を訪問し、1学期に指導主事が小学校も含めて、全ての学校の習熟度別の授業を参観しております。それぞれ習熟度で分けているというメリットをきちんと出してほしいと思います。子どもたちに合った学び方がきつとあると思いますので、その中でなかなか時間を確保するのは難しいと思うのですが、例えば学期に1回あるいは単元に1度ぐらいは時間をかけて子どもたちにしっかりと考えさせる、そこでお互いに発表をさせ言語活動の充実を図り、それぞれの考えを伝え合う中でより数学の魅力、おもしろさを子どもたちが実感できる授業を行ってほしいなというのを伝えております。

子どもたちがじっくり考える時間を確保するという事は大切なことであると思いますので、そういった意味では今回7社ありますが、本当に工夫した内容で教科書の後半等にも子どもたちの興味・関心を高めるような題材がたくさん盛り込まれているので非常に良かったなと思っています。あとはそれを先生方に年間指導計画の中にうまく位置付けてもらい、数学って楽しいな、おもしろい教科だなと子供たちに思ってもらえるように、数学という教科の魅力や専門家である中学校の数学の教員と一緒に学びながら伝えていくという活動をぜひ取り入れてほしいと伝えているところです。実際にそういった授業をしてくださっている先生も結構います。ICTを導入していただいたことは考えることを補助してくれますので、非常に子どもたちにとっても効果が上がっていると考えています。

菅谷委員長)

教科書は各社の努力により、学校だけでは不十分の部分も教科書を読みこなしてもらえれば十分数学の力がつくというレベルのものに仕上がっており、非常にそれぞれ工夫がされていると思います。

ただ一方、ページを見たときにたくさん出ていると、最初からお手上げというような感じがする人もいるかなと思います。そういう意味で説明の形がシンプルなのは、それこそ日本文教出版は結構見やすくなっているのですが、自学自習でも割とやりやすいのかなという気はします。

ほかに御意見ございますでしょうか。

三田教育長)

私は区の課題かと思う4つの視点から、全体を見させてもらいました。

まず1年生の段階で一番子どもがショックを受けるのは英数だと思います。カルチャーショックを受けて学校嫌いあるいは勉強嫌いになったりして学力が低下していき、不登校や問題行動が起こったりするというケースが非常に多いということで、本区ではその接続部分に力入れておりますので、全教科書会社が正の数、負の数から入って、どういう入り方をしているのか見てみました。あるところは日本一探しをやっていて、日本一の中でゴルフの石川がアンダー13という得点を出したが、そのアンダーとは何かを問い、そういうところから正の数、負の数のおもしろさを見る教科書もありました。それから基本調べで、ニューヨーク、モスクワ、パリ等世界各地の気温の違いからマイナスを見ていとか、原点をゼロにして前に歩く、後に歩くというところから正負の違いをとらえたり、様々な考え方が導入されていて、大変おもしろく見させていただきました。

数学の論理、原理というのはブラックボックスで見えていなく、子どもたちは何のために勉強をするのかわからないというケースもありますので、本区では子どもに学びがいを持たせるという意味で、私たちの生活に数学的な考え方がたくさんあり、生活を支えているということを発見する喜びがあつてほしいなと思っています。そういう点で工夫をされている、日本文教出版の教科書がおもしろいなと思いました。

それから、次に二極化の課題です。どの社もノート指導で既習事項等をつないで系統的な学習をするという工夫がされています。東京書籍、大日本図書、学校図書、教育出版、各社ともこれらについては捉えられていると思います。

例えば、私はその中でも基礎基本になる例題がどのように扱われているかということがすごく大事だと思っています。実は「東京ベーシック・ドリル」の導入に関しては、秋田県の市長との教育連携で提案したことなのですが、都教委がこれを取り入れてくださって、最初に4年生の算数から始めて、今小学校の算数は全部「ベーシック・ドリル」です。中学校はまだこれからのようです。このドリルは、例題は最も基礎基本でわかりやすくどの会社も工夫しているところなので、そこは全員が100点をとれるように、繰り返し反復しながらステップを確実に踏んでいこうということで作られました。東京都全体の学力調査の結果でも成果があらわれています。

それで例題を丁寧に扱ってステップを踏んでいるような二極化の対応をとっていて、しかも習熟度にも十分耐えられるような質の高い問題が出ているかどうか見させていただきました。

そういう点では、学校図書、数研出版、日本文教出版がとても良く対応できているかと思います。日本文教出版は、見つけよう生活への利用、説明しよう数学研究室というところで、例えば小町算や集合、円周率の練習、地球温暖化の解説、地震のS波、P波に関して取り扱い、数学の深み、おもしろさを個別に日常生活の中での解説だけではなく、各活動ごとに位置付けていっているという、学びの連続性というものを表現していると思いました。

それから、学力調査の結果の中で、全国的に統計と図形が課題となっており、本区も例

外ではないという点が気になっています。数学の半分は図形の領域で成り立っているかと思うので、そういう意味で各社どういう取り上げ方をしているのか見させていただきました。例えば相似と三平方の定理ですが、指を出して光を当てて影の大きさを見て、相似の関係をつかませようというデータや、ピラミッドの高さを出して、高さは違うが同じ三角錐ではないか、どうやってつくったのかと考える例や、拡大と縮小という、原図を拡大したら大きくなり縮小したら小さくなるという例、ビーズで何かをつくるという活動から相似を考えさせる例、白川郷の写真を出して、同じ白川郷であるのに屋根の形が同じ家屋が大小それぞれあり、そこから相似を考える例など、いろいろな工夫がされていると思いました。

身近でなるほどと思わせる、可視化しながら考えさせるというのがいいかと思います。三平方の定理も同じようにいろいろ工夫されています。ここは特につまづきの多い部分だと思うので見させていただいたのですが、ピタゴラスの話をストレートに取り上げている会社もありましたし、現象的に直角三角形の三辺の和に注目してどういう関係なのかということから三平方の定理のおもしろさを見出させるところもあって、無理なく考えられるという点、工夫されているなと思いました。本区の子どもたちの実態をクリアにしていく、あるいはさらに伸ばしていくという点から、見させていただきました。

どの会社もそれぞれの数学の実績、実践を踏まえてつくられていると思うのですが、最終的には学習指導要領の課題と本区の抱えている課題から選んでいかなければいけないなと考えております。

菅谷委員長)

そのほか、まだ御意見、御質問ございますでしょうか。

三田教育長)

さっき議論があったかと思うのですが、中学校でも数学、特に図形の理解を促すという意味ではICTの威力はすごいと思います。そういう意味で使われ方がどうなのかということと、各教科書のそれに対する対応について、実態を教えていただいた上で投票したいと思うのですが、どうでしょうか。

統括指導主事)

ICTの活用に関しまして、タブレットが全校入りしましたので、一人ひとりがタブレットを活用して授業を行うというイメージが強いとは思いますが、それよりも数学の場合は大型テレビにグラフを実際に映してみても全員で確認しながら描くというような使い方が多いかと思います。「ICTを使った授業は活用しない授業よりもわかる」と回答している子どもたちの割合がありまして、中学3年生では、「とてもそう思う」と回答した子どもたちは数学の学力の得点もかなり高い点数になっておりますので、ICTを活用することによって子どもたちの数学への興味、関心、それから定着にもつながっているということが数値からも読み取れると思います。

三田教育長)

4年前の、千川中学校で21世紀型スキルでタブレットを導入し、教室のどこでもICT機器を使えるようにし、今や全校で実施できるようになったということですが、座学で学力テストでいい成績とっている子が、ICTを使って多様に活動したり活用できたかという点意外とそうではありませんでした。それで、学習の相関関係やICTを使った授業とそうでない授業とを分けしたときに、ICT機器を使った授業のときのほうが低位層の子はよくわかったという結果が見られました。それはICT機器を使ったほうがわかりやすいということにつながっているのではないかと思います。教科書もICT機器をどのように有効に使い、子どもたちが難しくひっかかりやすいところにポイントを当てて工夫して活用できるかという点の編集に力を入れるということも、本区にとっては非常に必要なのではないかと思います。

菅谷委員長)

ほかにはございませんでしょうか。

数学はどうしても課題が大きいかと思いますが、先ほどから伺っていると学力テストの点数も随分上がっているようですし、ICTの活用も本区は先進的だろうと思います。ICTの活用と教科書のコンビネーションを意識してやっていただけるといいだろうなと思います。

それでは、中学校の数学について投票をお願いいたします。

<委員投票、確認>

菅谷委員長)

ただいまご確認いただきましたとおり、過半数を超えるものがありましたので、数学についての審議を終了します。

(委員全員異議なし)

菅谷委員長)

それでは、中学校の技術・家庭、技術分野について審議を始めたいと思いますので、説明をお願いいたします。

<統括指導主事 資料説明>

菅谷委員長)

今御説明いただきました教科書について15分の時間をとりますので、ごらんいただいた後、御意見、御質問をお願いいたします。

<委員 選定図書閲覧>

菅谷委員長)

それでは、中学校の技術・家庭、技術分野についての御意見や御質問をお願いいたします。

この技術の授業というのは当然実習がありますよね。昔は技術・図画工作という名前で工作についても扱われていたのですが、今はこの技術・家庭の技術での実習と工作の時間

には関連があるのですか、それとも別物ですか。あまりにベーシックな質問で申し訳ないのですが、教えて頂けますでしょうか。

統括指導主事)

直接的に関連ということではありませんが、技術の目標には木材の加工等が書かれていますので、材料と加工方法といったところで、小学校で実施した様々な素材を基にした工作等の延長上にある実習でございますし、中学校ならではの木材を使って大きな椅子をつくる等の作業も各学校では実施をしているという状況でございます。

菅谷委員長)

昨今、技術の内容というのは非常に生活に密着していると思うのですが、そういう意味では地盤というか、写真等がわかりやすいほうがいいのかと思います。その点、教育図書は割とわかりやすい印象を持ちました。

嶋田委員)

技術分野の場合、頭のフレッシュな若い世代に、どうやって未来に向かって技術やテクノロジーの発想を見つけていくのかということ大切にしていると思ったので、そういう点からまず見させていただきました。いずれもいろいろ工夫がある中で、例えば東京書籍では、こういうものとこういうものからこういうものが生まれてきたというような具体的な例が示されていて、子どもたちの中で、いろんなもののいいところを組み合わせると新しい技術が開発されたり、新しい商品ができてきたりするのかという発想があると思うので、とても将来に向けた発想があるなというように見させていただきました。

もう一つ、3社比べて一番違う分野が第3分野の生物のところだと思います。植物をどう育てるかということに関しては、いずれもベランダでもできるプランターの飼育等が書かれてあるのですが、動物の飼育に関してはかなり最初の部分で違いがあるように感じました。例えば教育図書は動物を飼育する技術として、乳牛と養鶏のことにきちんとページを割いているのですが、東京書籍の場合には2ページぐらいに短縮されています。豊島区の場合、技術としてそれを獲得しなくても子どもたちはこの豊島区内で生きていけるのかもしれませんが、そういった技術を獲得し発展させることによって日本人の食生活が支えられている、経済が回っている、そういうことに発展できるために少し分量があるほうがいいかなと思いました。

菅谷委員長)

渡邊委員、何かございますか。

渡邊委員)

技術という分野を考えると、物の製作というところが一番生徒たちが時間を費やす部分かと思うので、まずその物のつくり方に関して、どのような説明になっているのか3社比較させていただきました。基本的にはどこの会社も同じところを押さえていると思いますが、実際に作品を製作することが必ず伴ってくるので、では何を学校でつくるのかというのは、恐らくこの中から選んでいくことにはなると思いますが、いろいろな図があったほ

うが発想力が高まるのかなと思います。どうしてもこれという題材でずっと手順が説明されていると、それしかつくりたくないような気にもなりますし、その点3社比較すると多い会社、少ない会社とありました。

あとは、木工、プラスチック、金属とあるかと思うのですが、今はこれを全部やるのでしょうか。

統括指導主事)

今、1年生と2年生で技術は週に1時間で、年間で35時間です。3年生につきましては家庭科と合わせて35時間ですので、年間17.5時間という時間数になっております。2週間に1時間ということもありまして、全ての素材を扱うというのは難しい状況ですので、木材であったり金属であったりというような形で教員のほうで選択をしながら授業で扱っております。

渡邊委員)

いろいろな素材を扱うことは、これから社会に出るにあたって増えてくると思うので、そういうところの説明がどこまでなされているかは大事だと思います。ある会社はハンダ付けのところまできちんと書いてあります。今どきハンダ付けをすることはないかもしれませんが、やはり知っておくということは大切ですし、アクリル製品製作ということに関しても、アクリル特有の技術的な説明がなされていたり、教科書ですからいろいろなことの基礎知識がきちんとおさまっていて、幅広く説明があるほうが望ましいのかなと思います。

これからの時代、つくるというと製品だけではなく、プログラムということも考えられますので、プログラムに関しても書かれていまして、プログラムをつくるための論理的な思考についての説明も十分なされています。例えばこれからプログラムというと簡単な機械、ロボットのものよりかは、要するにソフトウェアとしてのプログラムというのが社会に出るとものすごく重要性があるのかなと感じます。昔で言えばベーシック言語を使うことがありましたが、今はベーシック言語を使わなくても普通にエクセルやワードの中のマクロとかというプログラムを使うところがあると思うので、一応情報としてはそんなものもあるというように、触れるほうがいいのかと思います。

今の若者はできたものはいっぱい使っていますが、自分でつくることを知らない傾向にあります。特にソフトウェアは全部そういった感じです。コンピューターができた当時は、自分でプログラムをつくる、それでゲームをするというのが、パソコン部や情報処理部等の主な活動であったほど、物をつくるということはそれに関しての技術を得ること、完成して喜ぶことを含意していました。しかしそれが省略されている今の世代に対しては、どういものが自分たちでつくれるのかといったことを学ぶ一番のポイントになるのが技術だと思うので、そういうところがきちんと書かれている教科書のほうがより役に立つのではないかと思い、見させていただきました。

統括指導主事)

プログラミングの授業を実は区中研の情報部が千登世橋中学校を会場に実施しました。子どもたちが流れ図を描いてそれに沿って、鬼役のキャラクターを自分でつくって追いかけてこをするというような簡単なゲームに、少しずつスピードや動き方を変える等の工夫を子どもたちが加え、子どもたちが主体的に取組み、改善し、また自分で学びながら、その中で情報機器を活用するといった授業を行っていました。

調査部会長からも、豊島区はICT機器の整備が進んでいるので、情報に関する内容が盛りだくさんの教科書でも、いろいろな取り組みは可能かと思うので、特に問題ないという話は上がってきております。

三田教育長)

私はこの教科書というのは、技術科のこれからの教育という意味で今、曲がり角に直面していると感じます。ある会社はアナログ情報については全く触れていなくて、情報化社会の問題をデジタル情報に特化して掲載しているのですが、本当にそれでいいのかは疑問です。例えば本区が進めている学習情報センターでは、物の考え方についてはアナログ情報とデジタル情報を両方駆使できるような教育をしようと提案しております。だからそういう点で視点が少し違うかなと感じました。

それから、子どもたちの実態を見ると、スマートフォンからどうやって自分が情報モラルを確立したり、そこから脱出して自分の時間を確保できるような学びができるのかという点が、今の子どもたちが直面している課題だと思います。だから、この教科書を使うことで子どもたちに本当に実践力が身につくのかという視点で、見ていく必要があるのではないかと考えました。

それから、どの教科書を見ても情報化社会でのスマホやノートパソコン等の対応については書かれているのですが、残念ながらタブレットはあまり出ていません。本区の子どもたちが、これを見て遅れているという感じがしないかなという印象はありましたが、ないものは仕方がないので、そういう時代が到来しているということは頭に入れておいてもらいたいと思います。技術に関する情報は次々と塗りかえられていっているので、教科書が追いついてくるのも大変かと思いますが、そこは期待していきたいと思います。

また1つだけ質問しておきたいのですが、技術・家庭で学習するであろう情報モラル等は子どもたちにきちんと身につけているのかについて、学力調査はありませんが、例えばアンケート調査や生活指導、教科の担任の先生から何か得ている情報があれば教えていただきたいと思います。

統括指導主事)

中学校の全学年で総合的な学習の時間がございまして、パソコン等を活用して調べ学習などを行って進めているのがほとんどでございます。最初の時間に、小学校でも当然授業として行われていると思いますが、情報を取り出す際の注意事項や、またはそういう機器を扱うときの注意というのを技術とタイアップをしながら、まず子どもたちにきちんとし

たルール等を指導した上で活用を進めています。教育長がおっしゃるように、なかなか子どもたち全員に身につけているかどうかは疑わしいところです。当たり前のように情報が氾濫している中で、それを簡単に取り出せる時代になってきておりますので、技術の教員だけではなく、学校全体で指導を進めていく必要があると思います。

学力調査とあわせて中学校3年生に意識調査を行っておりますので、その結果もあわせてお伝えをさせていただきます。

まず携帯電話、スマートフォンでゲームやメールなどをしているという質問事項に、「とてもよくある」と答えた生徒が53.5%、半分以上です。「時々ある」と答えている生徒が21.2%。また、携帯電話やスマートフォンで電話やメールをするときは家の人と時間を決めていくかという質問事項ですが、「決めていく」と答えている生徒は30.8%、「決めていない」と答えている生徒は64.5%という割合でございます。また、家の人と決めた約束や決まりを守っているという質問事項に、「とても当てはまる」と答えた生徒は27.3%、「大体当てはまる」と答えた生徒は54.4%、逆に「全く当てはまらない」や、「あまり当てはまらない」と答えた生徒は18%強います。一定程度の生徒はこういうルールや決まりをきちんと守っているという結果が出ていますが、そのあたりは繰り返し指導を行っていく必要があるということが読み取れるかと思えます。

三田教育長)

本区で例えば技術・家庭で使っていたパソコン室を全部解体して、今、全教室でタブレットを使えるという環境をつくりました。だから技術・家庭だけではなく、技術・家庭で学んだことが他教科に非常に生きてくるということを考えると、技術・家庭がそういう意味で発信の学習になるかと思えます。

今話を聞いて本区ではかなり課題があるという理解をいたしましたので、そういう視点から見せていただきました。東京書籍は192ページから255ページまで情報について時間を割いており、アナログ情報とデジタル情報の兼ね合いというものをきちんと位置付けて書いています。だから情報モラルも情報特性によってモラルの関係付けがされているので、一般的に情報モラルと語られている、そこが非常に共感できる場所です。他教科との関係、道徳というのを明記して連携して考えてみようということにページを割いて、単に教師側や大人の価値観を子どもたちに押しつけるのではなく、今置かれている問題について自分で考えてごらんというような形になっているので、非常に大事なところかなと思ってお見させていただきました。

ただ、ここにはノートパソコンとスマートフォンは出ているのですが、例えばタブレットとノートパソコンの特性や違い、あるいはスマートフォンと携帯電話については書かれていません。携帯電話に関しては、製作中止になるから問題にしないでいいというわけではないかと思えます。我々も携帯電話やパソコンを持って実際に緊急時の対応をしているわけですから。その特性の違いについて、タブレット型のは好む好まないに関わらずどんどん情報が入ってくる一方、携帯電話に関しては自分が選択したものしか通信が双方向で

もあり得ないというような違いや、そこから情報モラルや情報の適正を生かした生活のあり方というのを考える上ではまだ課題があるのかなと思いますが、一番進んだ情報を提示しているという点では子どもたちの役に立つのではないかと思います。

先ほど嶋田委員からあった食料生産や、いわゆる情報管理をどのようにして物をつくっていくのか、育てていくのかという点についても、情報管理の視点でデジタル情報が今後の有益な社会の支えになっていくということがここに示されています。

あと、環境関連も各項目で用意されていますが、エネルギーの問題は特に深刻だと思います。3・11の後、電子力発電が制約されたり指定されたりという流れの中で、エネルギー不足が大変な問題になっています。これをどうするのかという点で、エネルギー問題について関連させながら巻末に考えさせる場面があつていいと思いました。本区でも目指している新庁舎の周辺、スマートシティ、コンパクトシティ、そういうものを考えて、これからの町に対する技術に関して考えたほうがいいのではないかとこの点を話題提供しているところ、またユニバーサルデザインの意味と大切さについて豊富な解説があるところ等、これからの方向性を占めている点では非常にいいなと思いました。

また、開隆堂ですが、写真と図解を使い分けて提示することで見えないものを可視化する、見えるものをリアル化するという、上手な表現をされていていいなと思いました。

それが学習の重要な要素になってくると思うので、その点感心してみさせて頂きました。

あと、その他の使用上の便宜という点でフローチャートの図に関して、形だけではなく色別でと説明がありますが、その点はシステム思考をしているかどうかという技術の汎用性や進化を進めていく上で、非常にこれから子どもたちに必要なツールになってくると思います。そういう点で技術・家庭の特性を上手に表現している教科書としていいなと感じました。

総体としては、情報化社会にどう対応するかというのが技術・家庭の大きな課題になってくると思いますので、そういう点ではやや東京書籍のほうがすぐれているのかなという印象を受けました。それぞれの会社で大変工夫されております。

菅谷委員長)

千馬先生、何かありますか。

千馬委員)

私は3社の特徴、工夫を4つの点から考えてみました。1つが導入の工夫、何を学ぶかということの記載がどうかというところで、3社とも共通してよかったと思っています。

2点目がマークの活用、役割を安全性の絡みでどれだけ大事にしているかという点ですが、この3社は一応対応しているのではないかと感じました。

3点目は情報への対応ですが、若干それぞれ温度差があり、私の判断では東京書籍と開隆堂が工夫されているのかなと思いました。

最後に作業手順に関しまして、技術の場合これはなかなか子どもたちの視覚に訴える大事な役割を持っていますが、これについては東京書籍、教育図書が鮮明に上手にできてい

るのかなと思います。

それらを踏まえて、情報関係で1つだけ質問をさせていただきます。情報モラルは技術科にとって大きな役割を持っていますが、これは学校だけでは不十分なので、保護者や関係機関との連携がこの教科を通して求められてくると思うのですが、そこら辺で豊島区で連携して実践し、効果を上げているような事例がありましたら教えていただきたいです。

統括指導主事)

実は豊島区いじめ対策委員会というのを立ち上げておりまして、その中でスマートフォン、携帯電話の問題が子どもたちの非常に大きな問題となっておりますので、今後PTAとも連携をしながら豊島区独自の携帯電話、スマートフォンのルールを策定する方向で、現在、準備を進めているところでございます。その際に学校からいろいろな情報をもらい、また技術科の先生方が日ごろどのような形で情報モラルを指導しているのか、子どもたちの実態はどうかということに関して、5月には小学校1年生から中学校3年生まで、アンケート調査を実施しました。その結果も踏まえながら今後、技術科の先生方とも連携を図りながら豊島区全体できちんと対応していきたいと考えておりますので、成果が上がりましたら御報告をさせていただきたいと思っております。

菅谷委員長)

技術・家庭の技術分野というのは、単独の科ではなくいろいろな科と結びついた、非常にいろいろなところと関連しているものなので、そういった点ではどの教科書もよくできていると思えました。少しずつ各社特徴があったように思います。

それでは、技術・家庭の技術分野についての投票をお願いしたいと思います。

<委員投票、確認>

菅谷委員長)

ただいま御確認いただきましたとおり、過半数を超えるものがありましたので、技術・家庭、技術分野についての審議を終了します。

(委員全員異議なし)

菅谷委員長)

続きまして、中学校技術・家庭、家庭分野について御説明をお願いします。

<統括指導主事 資料説明>

菅谷委員長)

それでは、資料をごらんいただきまして、後ほど御意見をいただきたいと思っております。

<委員 選定図書閲覧>

菅谷委員長)

家庭科というのも、家族の関係やそういったものを重視しており、家族あるいは地域との関係を内容として含んでいると思っております。家庭科の授業の目的が、家庭の中のいろいろなものについての理解を深めるということだと理解すると、例えばこの資料には、家で家庭の中の仕事に費やす時間は中学生だと非常に少なく、0.1%ほどと書かれております。

が、学校の教育の中では、家庭の仕事にもう少し関心を持ってもらい、家庭の中で生徒たちがもっと力を発揮してほしいという思いがあるのでしょうか。

統括指導主事)

先ほど家庭分野の目標でお伝えをさせていただきました、自立という内容のAの項目、家族、家庭と子どもの成長という中に記載がございまして、自分の成長と家族について次の事項を指導するという内容の中に、「自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて考えること」と学習指導要領にも明記されておりますので、この内容については、家庭科の授業の中でも十分に指導を行っているところでございます。

菅谷委員長)

あとは家族との共助について、もう少し家庭での自分の役割を、自分のことだけではなく家族全体の中での役割を持たせるというねらいがあるのでしょうか。

統括指導主事)

こちら学習指導要領に書かれておりまして、これからの自分と家族とのかかわりに関心を持ち、家族関係をよりよくする方法を考えることと記載がございまして、今、委員長がおっしゃられたとおりで、この家庭科の中で指導をする内容ということでございます。菅谷委員長)

例えば、地域とのかかわり、家族と家庭というのは自分のうちだけではなく、地域との関係があるわけですが、その中で福祉の問題は、中学校だと家庭科で扱うのでしょうか。

統括指導主事)

福祉の関係も先ほどの子育てのところに書かれていたように、子ども家庭支援センター等との連携についての内容や、子育てに関しても地域で子どもたちを育てていくといった内容も盛り込まれていますので、将来子どもたちが親になったとき中学生のときに子育てについて学ぶことが、いろんな関係機関とも連携することにつながっていくと考えます。菅谷委員長)

嶋田委員、何かあります。

嶋田委員)

私は先ほど統括がおっしゃった視点を中心に見させていただきました。昨今の若者の状況を見ると、義務教育を終えていろいろな状況の中で子育てを始めなければいけない子どもたちが増えてきて、そのときどういうところからどう支援をしてもらえるのか、あるいはこれまで子どもとして扱われてきた自分が自分の子どもにどう対処しなければいけないのかという視点を、家庭分野の中である程度教えていかなければいけないと思いました。

そういう意味でそれぞれ工夫は凝らされているのですが、例えば東京書籍で、赤ちゃんというコーナーがあり、赤ちゃんの写真が出てきています。自分がこれから母親になったときに赤ちゃんどう対面するか、職場体験として幼児の施設に行くのではなく、自分のリアルな問題として捉えられ、また子どもを産まなければいけなくなったときにどこに

支援を求めることができるかということもそのページの近くに具体的に書いてあるので、そういうときにも子どもたちを支えられるのではないかなと思って見させていただきました。

もう1点、食についてですが、小学校の家庭科の教科書を見たときにも感じたのですが、全国の郷土料理を紹介しているだけでは、食文化というものがどういうものかわかりにくいので、地産地消の問題、あるいは旬の野菜の問題とリンクさせながら、そういう食文化を生んできた地域を捉えられるようにしてつくっていく教科書もいいなと思いました。

三田教育長)

個人的な体験から言うと、自分自身が小学校のときに学んだ家庭科というのは今と大分違ってまして、例えば食の調理実習で食事のつくり方や御飯の炊き方について学び、それが自分の生活の中ですぐに生きたのを覚えています。洗濯もそうです。水一つでも、ひなたの水と冷たい水で比べてどちらがよく落ちるか、洗濯板で実習を行いました。だから極めてガラパゴス的な存在の家庭科ですが、そういう教育を受けたからこそ自分が幼少のころから自立して生活できていたかなと思っています。大人になっても親から離れてもそういうものが生活技能として役立つと思うので、今の教科書もそうなってほしいなと思います。

例えば朝食欠食で学校に来るお子さんについて、問題にしたり話題にしたりしますが、家庭科でやっていることが実際に生きていないのではないかと思います。だから今度文科省は生きる力から生き抜く力に変えていこうと言っていますが、そういう地に足を着けた教科書かどうか、またその教科を通して子どもたちが自立する力をつけていけるかどうかという視点でぜひ見ていきたいです。

それぞれねらいは学習指導要領に示されているとおり、3社ともきちんと書かれていますし、消費者としての生活のあり方の問題や石油の問題、衣食住についての課題、それから家族や地域との関係もそれぞれ述べられていて、非常にいいなと思いつつ見させていただきました。東京書籍は、生活技術を家庭生活での技能に高めていくような取り組みが随所に、内容の選択のところでも述べられていていいなと思います。それから、必要に応じて時に振り返りができるように配慮されている点も良いです。保育に関しても触れられているので、これから自分の人生設計をし、キャリア教育をしながらどんな生き方をしていくかというときに、家族構成を考えていくというのが一つの重要なことだと思うので、こういう点では共感できる教科書ができていると思います。

それから教育図書は、各章ごとに復習するための確認問題が出されていて、自分ができるできない、わかったわからないということを課題として押さえていくというような、学習スタイルをとっている点、非常に好感を持ってました。技術家庭というのは自分が体得して、どれだけ身につけて役立てていくかという、極めて生活文化的な要素を持ったものなので、そういう意味では自己確認をするというのがすごく大事で、それをよく表現しているのかなと思いました。

開隆堂ですが、冒頭から自立に向かって始まって共生社会、それから持続発展可能な社会に向かって、人や物ともかかわりながら学ぶという、そういう人生を、1人の人間の生き方のサイクルで、最初からこういう目標でやるということをきちっとうたっています。生活の自立、精神の自立、経済の自立といろいろありますが、子どもからいうと経済の自立はなかなか簡単ではないと思うので、それを自立するためにキャリアを積むということになるかと思います。同時に生活の技能は、生活の自立につながっていくと思うので、中学生は生活と精神の自立について特に考えなければいけない時期ということで、上手に家庭科の教育の目標が出されています。

それから、親の仕事の都合で、食事が朝恵まれて用意されている家庭もあれば、そうでない家庭もあると思います。そういったときに生活習慣と食事というのはとても大事だということを伝え、食事を自分で献立をつくって計画して用意できる力をつけてほしいなと思います。

私はかつて小学校で現場にいたときに、家庭科の先生と栄養士さんが一生懸命協力して、子どもたちにレシピを提供し、学校給食でそれを取り上げるという取り組みを行っていました。今日は何年生の誰々君と誰々君のグループが考えた給食ですと放送で紹介されて食べるのですが、子どもたちもそういうことをやると非常に自信を持って、献立を考えることができていたようでした。そうすると、親に献立を提案したり、親の具合が悪いとき等に自分でつくって食べたという子どもがでてきました。まして中学生はそういうことができるレベルだと思うので、開隆堂の場合は健康と食生活に関して丹念にページを割いているという点で、知ることがわかる、わかることができるという、学習の連続性ができるのではないかなということ、よくできていると思いました。

千馬委員)

私も家庭生活への興味、関心を高める非常に大切な教科だと受けとめています。とりわけ、この家庭科のねらいの生活の自立、家庭生活のよりよい向上意識という2つから、私はこの教科書をきちっと活用していく必要があるのかなということで見させていただきました。生活の自立につきましては、どの社も自立、共生をベースに導入されていると感じます。

あえて言うならば、開隆堂の導入が私はおもしろいと思いました。生活の自立、精神的自立、経済の自立というのが、まさに今本当に大事な要素だと私は思っています。そんなことをきちっと導入で押さえながら健やかな成長を図っていくということは、非常に有効なことだと受けとめました。

家庭生活のよりよい向上につきましては、私は消費生活の向上を大事にしてあげたいと思います。特に今いろいろ問題が多い消費生活の中で生活していく子どもたちがトラブルに巻き込まれないためにも、3社ともきちっと情報提供して教材化して下さっているかと思われます。そのようなことも踏まえると、これからの家庭科教育、家庭科の役割というのは非常に大きいなと受けとめました。

菅谷委員長)

渡邊委員、いかがですか。

渡邊委員)

技術科と同じで家庭科も学校でやる授業の時間数が非常に少ないだろうと思います。教科書というのは生徒たちが自分で読んで感じてという部分が非常に多いと思いますし、学科の内容は時間が少ない割には実際自分たちが生きていくためにとても重要なことが盛り込まれているので、その点考慮して見させていただきました。ポイントとしては、自立というところに関して、例えば家庭科ですから食事つくるというのも、親がつくってくれなくても自分でつくれますし、栄養をとるということになればお金があればコンビニでも買えるわけですし、そういう意味での精神的な自立が促されるような内容になっているかどうかという点は3つの教科書それぞれが違っているので、開隆堂は比較的そういうところがしっかり表現されているのかなという印象を受けました。

あと、インターネットを使ってお金を使用する子どもたちが増えています。インターネットだけでなく通販もあるので、いろいろな契約形態があるということもそれぞれの教科書に書かれています。その書き方も、こんな形態があるというようなものと、こうなるとうような危険があるというような書き方がされているところで若干の表現の違いがあるので、各子どもたちがこの教科書を使うことによって自分の生活をよりよくしていくためにどういうことを考えるのかというのがうまく引き出されるような部分に関しては、開隆堂がよく表現されているのかなという感じを受けました。

菅谷委員長)

それでは、中学校の技術家庭の家庭分野について投票をお願いいたします。

<委員投票、確認>

菅谷委員長)

皆様ただいま御確認いただきましたとおり、過半数を超えるものがありましたので、技術家庭、家庭分野についての審議を終了します。

(委員全員異議なし)

菅谷委員長)

本日の審議は以上といたします。事務局から何か連絡事項はございますか。

指導課長)

本日配付いたしました資料につきましては事務局で保管をいたしますので、机の上に置いたままでよろしくをお願いいたします。

菅谷委員長)

それでは、以上で中学校の教科書図書審議を終わります。

なお、次回は7月22日の午前9時から、中学校理科、音楽、社会、地理的分野、地図、美術の教科書図書審議を予定しております。

(午後 4時 00分 閉会)